



←縄張り宣言をするキジのオス。羽を打ちながらケンケンツと鳴く声は春の矢切の風物詩。

→江戸川の水も暖かさをましてきた。もうすぐゴールデンウィークだ。

矢切畑にキジが戻ってきた。

南北に長い矢切畑のほぼ中央に野菊の里浄水場の建設工事が始まったのがいまから十五年前。

それまではキジたちは南北二キロあまりの矢切畑を自由に歩きまわっていたが、十年前に浄水場が完成すると、ほとんどのキジたちが死に絶えた。

理由は矢切畑が分断され、生活する場がせまくなったためだ。それと餌場がなくなったせいだ。

あれから十年が経過して昨年あたりから浄水場より北でも、ときどきキジの鳴き声が聞こえていたが、今年は鳴き声と同時に縄張り宣言をする姿も見られるようになった。

矢切畑には、やはりキジの姿がよく似合う。桜の花が咲くころから鳴き始め、やがて数羽の子どもを連れた姿が見られるころ鳴き声はおさまる。

子どもを連れたキジといえば、以前はカルガモも子どもを連れて矢切の田んぼを泳いでいたが、これも見られなくなつて久しい。

理由は早くから田んぼの水を干すか

今週のクマ

→江戸川堤防を越えたこちら側はクマのテリトリーだ。見まわりを欠かさない。



→むかしの人はよく名をつけたものだ。花の先端から釣り糸状のものが伸びていることから、この名がついたウラシマソウ。



らだ。田植えが終わってまもなく、水を干す。稲の根をしつかりと張らせ少々の風にも倒れないようにするためだ。

おそらく学者か研究者が指導して農家にやらせているのだろうが、それによって米の収穫量は上がるだろうが、もっと大切なものをなくしているのだ。

たとえばカルガモの親子もそうだろうし、オタマジャクシもカエルも、クチボソやドジョウや小ブナ、コイ、ザリガニなどがそうだ。以前はメダカだったし珍しいタナゴなどもいた。

ヤッさんにいわせると、

「学者が悪い。稲を育てることを研究するのでもいいけど、そのために自然のバランスを失うようなことじゃダメだ」

そこでヤッさんは、学者には博物学をまず学ばせろという。博物学とは動物・植物・鉱物など収集、分類する学問。

ひとつの物をよくするために、そのほかのものをダメにするような学問はいらない、というのがヤッさんの考えだ。

たとえば、農薬などがその典型的な例だ。農薬を散布することで、多くの生き物が死ぬ。そんな時代はもう終わりにしないといけない。失うものが多すぎる。